

大いに違和感「自民党総裁選報道」

東京五輪・パラリンピック、菅首相退陣から自民党総裁選へと、異常といえる報道が続いている。テレビだけでなく新聞も、総裁選「騒動」報道に明け暮れている。毎日19日松尾貴史のちょっと違和感で、「衆院選控え お祭り騒ぎの判断は」と総裁選報道について松尾さん流に批判していた。総裁選報道には「ちょっと」ではなく、大いに違和感をもっているので抜粋して紹介する。



自民党総裁選の話題がテレビからあふれ続けている。もちろん、自民党員でなければ投票する権利がない。これほど多くの番組で、政権党ではあるけれども一つの党の話題ばかりがまるでメディアジャックのごとく報じ続けられることに違和感を覚える。それも、総裁選後に衆院選が控えている中、このお祭り騒ぎの一挙手一投足を連日テレビで報じ続けるというのは、どういう判断なのか、どういうそんたくなのか。名乗りを上げている議員の記者会見を生中継、あるいは生出演させ、言いたいことを存分に語らせる番組も多い。出演交渉での取り決めなのかもしれないが、その場に「痛いところをつく」出演者が皆無であることも多い。これは本当の「公正」「中立」と言えるのだろうか。

岸田文雄前政調会長は、以前には安倍前政権での森友学園問題の再調査の必要性をにじませるニュアンスで「さらに説明が必要だ」と言っていたが、このところはトーンダウンしたのか、ある方面からプレッシャーがかかったのか「再調査するとは言っていない」と軌道修正している。再調査もしないで、客観的な事実の積み重ねもなく「説明」と称する主張を繰り返し言い募られても、疑念を抱いている国民には納得のしようがないのは、この数年間で十分に思い知ったはずだ。それなのに「『説明』と言ったのであって、『再調査する』とは言っていない」という表現、これはすでに自民党でおなじみのごまかし答弁を指す「ご飯論法」が始まっているのではないか。

河野太郎行政改革担当相も、新型コロナウイルスのワクチン接種を進める状況下で、大変に多忙であろうと思われる最中に、党内の支持を取り付けるために躍起のようだ。記者会見では「自民党を変え、政治を変える」というスローガンを発表していたが、大臣になって変わってしまったのは他ならぬご自身のような気がする。もし自民党総裁になり首相になったら、気に入らない質問をされた時に「次の質問どうぞ」「次の質問どうぞ」と繰り返すのだろうか。

高市早苗前総務相も、テレビ番組に多く出て政策を披露しているが、庶民には何の恩恵もトリクルダウンもたらさなかったアベノミクスを「継承」し、発展させるという「サナエノミクス」は噴飯ものだ。このネーミング自体にもう「ご冗談を」と言いたくなる響きがあるのではないか。主観でいわせてもらうが、この含羞のなさはどうやって勝ち得たものなのか。過去の言動からしても、決して弱いものの味方をしてくれるような政治信条ではないことが読み取れるが、「日本初の女性首相に」と持ち上げる人も多い。

(2021年9月22日)